

新日本遺産「月の都 千曲」と「姨捨考」

千曲市歴史文化財センター 所長 稲玉修治

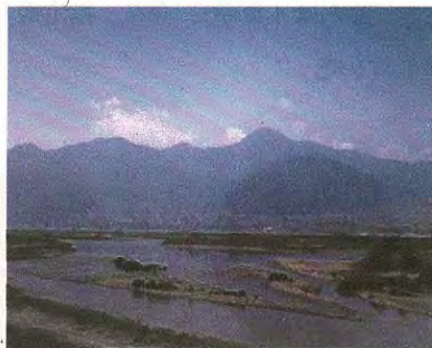
○ はじめに

千曲市の西に「更級（さらしな）」という地区がある。古来名高い名月の里の地名を今に伝える地だ。この里からの月の眺めは道行く旅人の目に留まり、京の都に伝えられ人々の耳目を集めた。

そうした歴史的な経緯を経て、千曲市は2020年6月、日本遺産「月の都 千曲」の認定を得た。名称（タイトル）を「月の都 千曲」とし「姨捨の棚田がつくる摩訶不思議な月景色『田毎の月』」という副題がつく。千曲市の姨捨地区一帯は、既に「名勝」（1999年）や「重要文化的景観」（2010年）などの国レベルの文化財指定はあるが、新たな冠が追加されたことになる。

その内容は姨捨棚田を中心に、その歴史や風土、風景も含めて関連する書画など29の文化財で構成されたコンテンツである。範囲等が厳格に指定された「名勝」や「重要文化的景観」とは異なる。

本稿では日本遺産の制度と日本遺産「月の都 千曲」を紹介し、なぜこれほど姨捨が複数の文化遺産等に選定されたのか簡単に触れてみたい。そして一言では足りない「姨捨」の奥深い魅力の一端を紹介し、皆様が当地にお越しになる際の一助になれば幸いである。



更級の里と冠着山

○ 日本遺産とは

日本遺産は文化庁が提唱する制度で、比較的歴史は新しく2014年に創設された。その主旨や目的を文化庁はこう述べる。「我が国の文化財や伝統文化を通じた地域の活性化を図るためには、その歴史的経緯や、地域の風土に根ざした世代を超えて受け継がれている伝

承、風習などを踏まえた『ストーリー』の下に『有形・無形の文化財をパッケージ化』し、これらの活用を図る中で、情報発信や人材育成・伝承、環境整備などの取組を効果的に進めていく必要があります。」（文化庁ホームページより）

当初は世界遺産を目指す地域や文化財を対象とした新制度と発表されたようだが、その後、主に外国人旅行者の増加を目的とした観光立国実現のための「クールジャパン」推進の中で方向性が固められた経緯もあるようだ。地域の文化財を活用し、地域資源として世界に発信し、旅行者を呼びこみ、それにより地域社会に新たな稼ぐシステム、経済効果を波及させることを目指したものとも言える。

また文化庁は、世界遺産登録や文化財指定を「登録・指定される文化財（文化遺産）の価値付けを行い、保護を担保することを一番の目的」とする一方で、日本遺産は「既存の文化財の価値付けや保全のための新たな規制を図ることは目的とせず、地域に点在する遺産を面として活用し、発信することで、地域活性化を図る」ことを目的とすると述べる。

このように日本遺産は、当初は世界遺産を目指す地域や文化財を対象とした新制度であったが、今はそうした趣旨は含みながらも文化財の活用に視点を移し、地域活性化に重点を置くところが従来の保護を主な目的とした文化財等の指定と異なる。

ただし目的の一つとされた観光立国「クールジャパン」は、新型コロナウイルス感染症の影響で当面その恩恵を享受することが難しく、それに代わる推進策の検討が選定地域にとって大きな課題になっている。

なお文化庁では制度創設時に国内で100カ所の登録を目指すとし、令和2年度の登録で104カ所と目標を超えた（県内は4カ所）。今後、指定取り下げなどに伴う入れ替え以外に追加は予定されないとしている。



日本遺産



月の都千曲

日本遺産の公式ロゴマークと当市の日本遺産のシンボルマーク

○ 日本遺産「月の都 千曲」ストーリー

「ストーリー」の下に「有形・無形の文化財をパッケージ化」したものが日本遺産とされるが、当市はどうか。まず申請時の「ストーリー」は次のとおりとしている。

「日本人の美意識を表す『月見』。中でも、歴史的に文学や絵画の題材となってきた『姨捨山(おばすてやま)に照る月』や『田毎(たごと)の月』は、日本を代表する月見の名所である。」

「姨捨は、地名の響きから、棄老物語を語り伝えてきた。それは、月見にちなむ文芸への遊び心を鼓舞する一方、棚田での耕作や伝統行事を通じて古老の知恵と地域の絆を大切に育ててきた。」

「すべての棚田に映る月影を1枚の浮世絵に表した歌川(うたがわ)広重(ひろしげ)の摩訶不思議な『田毎の月』。そんな『古来の月見』や、『月の都 千曲』が奏でる『新しい月見』に出かけよう。」

月の名所として国内で名高い「姨捨の名月」を背景に「月見文化」にスポットを当て、関連する文化財群をコンテンツとして提示したのが「月の都 千曲」であるとする。日本人なら誰でも知る「棄老伝説」を踏まえ、本地域をひとつの文化として楽しみ、文芸等への遊びに昇華していった古人(いにしえびと)の取り組みに改めて掘り起こし、現代の視点で光を当てようとしたのが日本遺産「月の都 千曲」と言える。次項ではその内容である「構成文化財」について触れてみたい。

○ 構成文化財

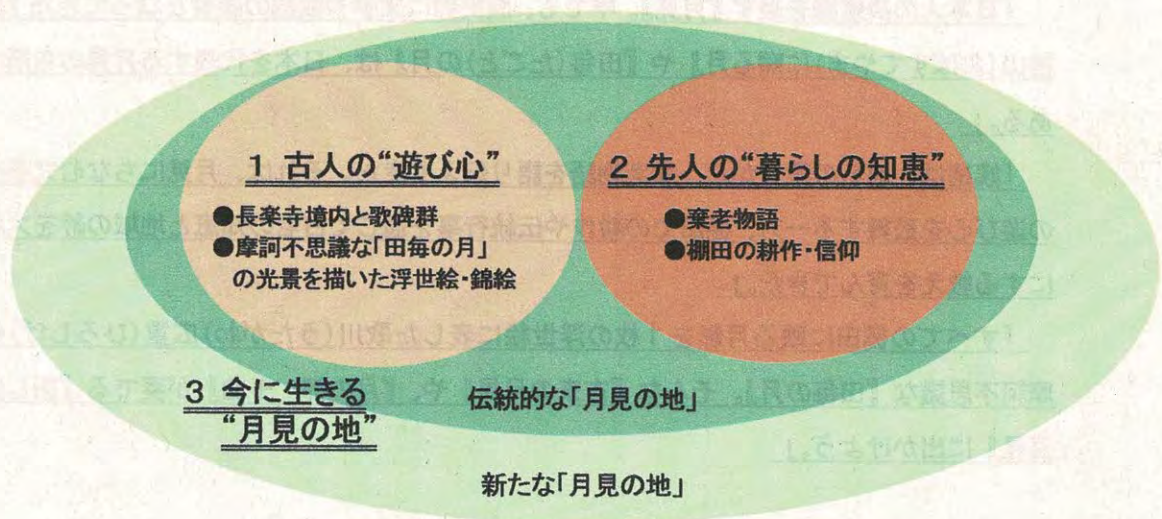
「月の都 千曲」を構成する文化財だが、まずその数は全部で29登録されている。(文化財は国等の指定、未指定を問わない)。

日本遺産は複数の文化財が一体となったパッケージだが、他の日本遺産も同様で、中には100を超えるものもある。この29が他所と比べて多いか少ないかは、調べた限りでは平均的と思われる。また数の多さから、構成文化財が自治体の垣根を超えることも珍しくなく、複数の県で指定される日本遺産もある。

千曲市は市の単独申請で、市内だけで構成されることも特徴の一つである。なお文化庁は単独の自治体で構成される日本遺産のコンテンツを「地域型」、複数の広範囲にまたがるものを「シリアル型」として区別している。

さて、これほど多数だと申請する際に一定の整理が必要で、その内容が認定の際に問われることになる。構成文化財の見せ方で価値が決まる、とも言えよう。

当市の場合は構成文化財を『古人の「遊び心」』、『先人の「暮らしの知恵」』そして『今に生きる「月見の地」』の3つに分け、パンフレット等ではそれぞれを「遊」、「知」、「月」と称し紹介している。



「月の都 千曲」3つの柱

■ 構成文化財「遊」

古人（いにしえびと）の「遊び心」と称し、和歌、俳句の短詩形文学や浮世絵などの文学作品に焦点を当て、その事績を中心としている。平安時代の勅撰和歌集である古今和歌集で「我が心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」（作者不詳）と詠われたことに始まり、当地を訪れた文人墨客の浮世絵など、古人の創作物等が中心である。

未だ見ぬ「さらしなの里」と「姨捨山の月」への思いを「はるかなる月の都に契りありて秋の夜すがらに更級の月」（新古今和歌集）と詠った藤原定家のように、はるか彼方の京の都で評判となった「姨捨の風情」に思いを寄せ、来訪歴を問わず、この地に恋い焦がれた文人墨客がいかに多かったかが伺える。

現代の我々には想像できないが、苦勞しながら当地を行き交った旅人や地方赴任の役人などから、この地の眺めが感嘆の声とともに都に伝えられたのであろう。この地に関心を寄せた当時の人々の心に思いを馳せるのも、姨捨を語るうえで興味深い。

なお日本遺産認定時の副題である「姨捨の棚田がつくる摩訶不思議な月景色『田毎の月』』というのは、歌川広重の、科学的にはあり得ない、棚田一枚一枚すべてに月が描かれた浮世絵からの着想である。



歌川広重「信濃更科田毎月鏡台山」

■ 構成文化財「知」

「暮らしの知恵」と称し、主に「棄老物語」、「姨捨の棚田」、そして「月に関わる信仰」を中心とした文化財群で、日本遺産の地元に生きる我々の祖先、そして今の私たちにつながる人々の営みを中心としている。

棄老伝説は世界中に存在し、日本各地に伝わる伝説で珍しくはない。当市の姨捨が、なぜそのように名付けられたかは諸説あつてははっきりしないが、棄老が転じて親孝行の話となったのは、かつて更級郡の建部大垣(たけべのおおがき)が親孝行であったことで税を終身免除された記述が平安時代初期の『続日本紀』にあることに端を発していると言われている。

また姨捨の棚田そのものや、その景観をつくることに繋がった大池(江戸時代初期の人工池)、その水を棚田に運ぶ水路システム、そして眼下の武水別神社と神社にまつわる伝統文化なども構成文化財としている。

■ 構成文化財「月」

「今に生きる月見の地」と称し、伝統的な月見の場所としての「姨捨」と、歴史的に新しい文化財等を繋ぎ構成されている。周囲の眺望を成す山や周辺の遺跡、旧街道から姨捨駅のような近代施設、そして郷土食である「おやき」などの食文化も含む。

「伝統的な月見の名所」では、長楽寺を中心に、当時の街道や古道、そして遺跡などを構成文化財としている。長楽寺が月見の名所となったのは、芭蕉の来遊以降とされるが、その後多くの人びとが鏡台山に昇る月を愛で、月の名所となっていた時代のものが多い。

『善光寺道名所図会』には、長楽寺から望むことのできる山や岩などの見所が「姨捨十三景」として紹介されるが、これは今でいう観光地の「名所めぐり」を先取るもので、こうした仕組みが江戸時代に創り出されていたことは大変興味深い。

「新しい月見の名所」では他に旧国鉄時代の「日本三大車窓」で名高いJR姨捨駅など、近代以降の建造物で、今では登録文化財となった複数の建物も含まれる。

以上が今回の日本遺産登録で申請し、認定された中身を簡単に紹介したが、全ての構成文化財は別表を参照してほしい。

「日本遺産 千曲」構成文化財一覧

ストーリーの「柱」	事象・性質	構成文化財等(指定/未指定)	
		番号	名称
1 いにしえひと 古人の「遊び心」	月の名所 和歌・俳句	1	長楽寺境内と歌碑群 (国 名勝・文化的景観)
	摩訶不思議な「田毎の月」 浮世絵・錦絵	2	歌川広重「信濃更科田毎月鏡台山」
		3	揚州周延「更科田毎の月」
2 先人の「暮らしの 知恵」	棄老物語 父母や古老の知恵に対する感謝の教え	4	藤原信一「教訓画譜 姨捨山之図」
	姨捨の棚田耕作	5	姨捨の棚田(国 名勝・文化的景観)
		6	大池(国 文化的景観)
		7	更級川・分水工・用水路(国 同上)
	月に関わる信仰	8	武水別神社 高良社本殿
		9	同 神官松田邸
		10	同 神宮寺跡
		11	同 仲秋祭
		12	同 大頭祭(国 記録選択)
		13	大池の百八灯
	14	稲荷山の街なみと祇園祭(国重伝建)	
	15	月待ち行事一二十三夜塔	
	16	冠着神社と選擇所	
3 今に生きる「月見 の地」	伝統的な月見の地	17	冠着山(姨捨山)
		18	鏡台山
		19	東山道の支道
		20	更級郡衙推定地
		21	北国街道脇往還善光寺道(国 選定)
		(1)	長楽寺境内と歌碑群 (国 名勝・文化的景観)
		22	姨捨十三景
	23	姨捨駅 駅舎	
新たな月見の地	24	冠着山のヒメボタル生息地	

		25	笹屋ホテル別荘(国 登録)
		26	長野銘醸酒蔵(国 登録)
		27	坂井銘醸酒蔵(国 登録)
		28	千曲川のハヤのつけ場漁
		29	蕎麦・おしぼりうどん・おやき

閑話休題、実は、当市は今回の認定以前に3度申請を行い選に漏れている。市は申請地が過去、国レベルでの文化財等に指定されているため、自信をもって応募したが、意に反し落選を続けた。これは制度に対する理解が足りなかったことが要因であるが、構成文化財の整理とストーリーへの焦点の当て方が弱かったのかもしれない。

ちなみに前年の令和元年度申請時の名称は「さらしな・はにしな、『ズク』が創った二千年の絶景 ～人びとの営みと引き継ぐ歴史遺産～」であった。このタイトルからストーリーの組み立てに何となく押しが足りない感じがする。

こうした申請時のタイトルと構成は担当者が最も頭を悩ますところで、4度目ようやく選定された今回、尽力した職員の努力を表したい。

○ 「月の都・千曲」を紐解く

「日本三大車窓」のJR姨捨駅からの眺めは、多くの旅人の心を魅了する。いかにも日本的な情景の地にありながら、大正時代の洋風建築の趣が伺える「JR姨捨駅」は、何故か不思議と風景に溶け込んでいる。

駅を起点にスイッチバックの線路にある遮断機の無い踏切を超え、長楽寺に向かって下る小道は、途中に「月見畑」と呼ばれる一角（かつて観光客が月見の宴を繰り広げたときれる場所）があり、当時の人々の月見の喧騒を思うと、何か愉しさを覚える。

この姨捨からの眺めは多くの人々の心を打ち、夜景は善光寺平を一望できるため、JR東日本の特別列車「四季島」が長野県内で唯一立ち寄り乗客が下車する駅となっている。

長楽寺の正門を出て少し進むと一面の棚田が広がる。国名勝「姨捨田毎の月」の地だ。けれどもかつて藤原定家が思いを馳せた平安時代に、実は棚田は存在していない。今は互いに欠かせない棚田と名月の情景は、実は江戸時代以降に注目を集めたものである。

棚田は我々の先祖が生きるために開墾し、命をつないだ人々の営みであるが、名月は棚田開墾以前から有名であったことは間違いない。ただし今では棚田の景観は欠かすことができない。

なぜこれほど、この地の景観が都で評判となったのかは諸説ある。ただ確実に言えることは、この姨捨棚田の周辺や眼下の千曲市は古くから交通の要所であり、北信州の主要な

複数の街道が交わる場所であったことだ。日本遺産の構成文化財にも、奈良時代に開かれた「五畿六道」の一つ、「東山道」の支道が掲げられているが、そうした古街道が複数この地の近くを通っていた。

塩尻の洗馬宿で中山道から分かれる「善光寺街道」は、やはり姨捨の棚田のすぐ脇を通る。そして姨捨棚田眼下の稲荷山の街は、かつては善行寺街道最大の宿場町であった。旅人の多くが、この地にも訪れたことだろう。

現代も千曲市内には県内の主要国道のほか、上信越自動車道と長野道が通り、更埴インターチェンジと更埴ジャンクションがあつて、北陸新幹線も通っている。交通の要所である特性は過去も現在も変わらず、人々の往来が多くある。

さてこうした主要な街道が多いのは事実でも、それだけで果たして姨捨の名声を高めた決定的な理由となるのか。今よりもはるかに鄙びた場所であった日本遺産の舞台は、この地に伝わる伝説が人々の想像力を掻き立てることで、同じような眺望を有する他所より優位であったことは間違いないと言える。姨捨伝説という時に物悲しい伝承は、街道を行き交う多くの旅人の人口を膾炙して、その眺望の価値をさらに押し上げたはずだ。

また信州の山国の奥深くに「月の都」があるという話は、天照大神を祖とする天皇が有らせられる「日の都」である京都との対比で、アマテラスとツクヨミの関係もあり、より身近に感じられたのかもしれない。日本神話も絡む素晴らしいコンテンツであると、当時から認識されていたのではなかろうか。そう思うと「月の都 千曲」は、日本遺産に選ばれるべくして選ばれたような気がしてくる。

最後に当地の月が京の都人の耳目を集めた証拠ともいえるエピソードを紹介し、本稿を閉じることとする。

○ 京都東山「新更科」と「羊羹」

かつて私が観光課に勤務していた二十年ほど前、一本の電話を頂戴した。京都在住で長野県人会の会長を務めた弁護士のT氏（木曾郡出身）からで、内容は氏の調べで、明治時代初期まで京都八坂神社の南に「新更科」と称された場所があり、そこは「千曲市の『更級』と何か接点はあるのか」というものだった。なお京都の「新更科」は、現在は「月見町」の町名で、「月」と関連があることは間違いない。（「科」と「級」の字の違いは当地でも両表記があり、ほぼ同義である）

正直、遠く京都の地の由来は知る由もないが、更級（姨捨）の名月は多くの旅人や役人

により評判は都にも伝わっていたこと、藤原定家を始め、更級を詠む和歌が複数存在することなどを伝え、「その高名さゆえ、地方の地名が京に逆輸入された希少な例かもしれません。」と答えたが、同時に、全く別のことを思い出した。

「姨捨は、盆地を流れる千曲川と名月で景観が形作られています。京都も同じく盆地で鴨川と月という対比で眺めも似ている。そう、こちら千曲市でも名月が昇る東側の山並みを『東山』と称しますが、京都でも東の山並みは、確か『東山』と呼びますね。信州の私たちが思う以上に、当地の眺望の見事さは京の人々の心を捉え、未だ見ぬ信州更級の名月に思いを寄せ『新更科』と称し大切にしてくれたのかもしれない。」と述べると、T氏は県人会でもぜひ報告したいと、たいそう喜んでくれた。

私自身、実は京都の大学を卒業し、T氏の言う場所は何となく想像がつく。「東山」の件も氏の電話でふと思い出したのだが、後に調べると、「新更級」の場所は今の京都市東山区である。案外、私の想像だけではない気がしてきた。

後に知るが、明治天皇の東京遷都の際、東京に同行した有名な和菓子の老舗「とらや」（東京港区赤坂）には、中秋の季節商品に「新更科」という羊羹がある。切り口に山と名月が現れる趣向が凝らされ、江戸時代から販売されてきた由緒ある銘菓だ。もしかしたらこの商品名「新更科」は、千曲市の更級を由来とするものではなく、京都に存在した地名に因むものかもしれない。御用達の和菓子は、京の人々も口にしていたはずである。

楽しみが多くない時代、今の我々が思う以上に姨捨の名月は都人（みやこびと）の心を、身分の隔てなく捉える魅力があったのだろう。ぜひ皆様も一度、京の都に思いを馳せながら、千曲市の日本遺産の地で「新しい月見」に出かけてみませんか。

